

石川県のハクチョウ類越冬数推計と邑知潟

沢田 隆

925-0047 石川県羽咋市御坊山町13-3

環境省「全国一斉ガンカモ生息調査」の定時定点調査データからは、ハクチョウ類の越冬数はカモ類との採食形態の違いから推計は困難と見られる。

石川県では、ハクチョウ越冬地が一斉調査地点に含まれない場合や、採食地へ移動後の調査時間帯など、カウント漏れの要因は多々ある。

県内でも越冬占有度(石川県で越冬する総個体数に占める、ある越冬地の個体数の割合)の高い邑知潟でも、採食地が広範囲で、場所の変移、環境変化による一時的な埒の移動も重なり、越冬数と一斉調査結果の羽数に差異が生じている。そこで、一斉生息調査結果を元データとし、これに一斉調査では把握できていない実際の越冬数や調査対象外の越冬数を加算し、採食移動による越冬ダブりの補正などを行い、県下越冬数の推定値を試算した。

集計誤差低減のため、県下占有度計70~90%程度で補正集計を行った。補正後の越冬数は最小羽数であり、実際の羽数は推定5~10%増と考えられる。

石川県は、渡り中継地と越冬地も兼ね備え、一斉調査後に、数も次第に増加し、2~3倍となる。

県内越冬地への拡散と南下、邑知潟の事例

石川県へのハクチョウ飛来は古くから知られていた、シーズンを通し安定的に継続して越冬と見られたのが、1987年度のシーズンの邑知潟最多羽数140羽からである。この地では数も次第に増加し、2000年度のシーズンでは最多羽数1,000羽を越えるようになった。さらに近年では1,500羽を越えるが、反比例するように県内占有度の低下が続いている。

邑知潟周辺における採食田の乾田化工事では、シーズン初めの好天で乾燥する田では採食不可能で、さらに南下移動や拡散に至る。このような状況下で、農道増設や整備のため採食環境へ人の入り込みが増加し、ハクチョウへの環境負荷が増大したり、潟ギロチン式潮止め提新設により潟内水位の上昇で埒環境が悪化するなど要因は多

表 1. 石川県ガンカモ類調査データからの置換.

年	一斉調査 羽数*	邑知潟 越冬羽数	補正後の 越冬羽数	邑知潟の 占有度	備考
1999	842	750	1,059	0.71	
2000	447	480	692	0.69	
2001	537	432	923	0.47	邑知潟38豪雪以来の115cmの冠雪で南下減少
2002	650	564	903	0.62	
2003	512	512	809	0.63	
2004	694	507	971	0.52	
2005	1,012	645	1,212	0.53	
2006	796	270	955	0.28	邑知潟60-70cmの冠雪で南下減少
2007	990	564	1,387	0.41	
2008	1,304	766	1,857	0.41	

* 邑知潟を含む

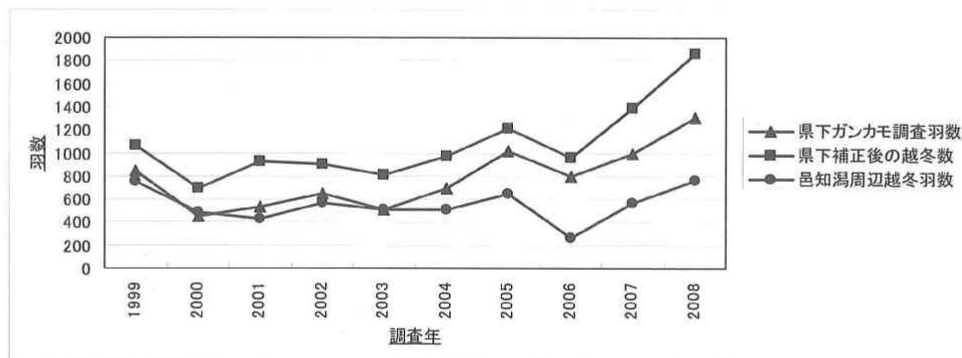


図 1. 1999～2008年の集計比較

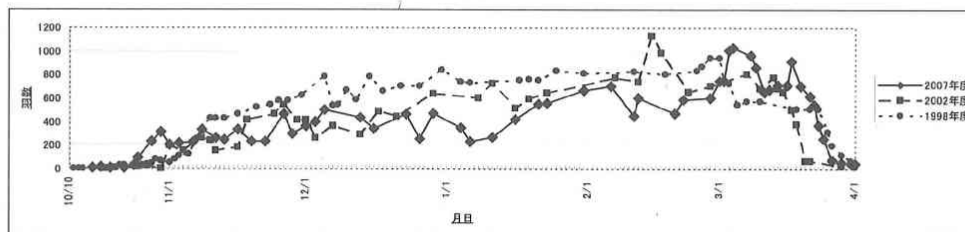


図 2. 邑知潟の越冬傾(シーズン年度表記).

岐にわたる。近年では越冬数は減少傾向にあるが、渡り中継地の性格も持ち合わせているので、最多飛来数は増加傾向にある。また、さらに温暖化ともなれば、越冬地の存続さえ危惧される。